

第4章 対話による学び

この章は道徳科授業過程における「対話」の意義やその方法について理解する内容です

2 言葉と対話 言語学的視点 (改編)

対話は、Dialogueで、「言葉を通じて」だと前回申し上げました。「対話」は言葉なしには成り立ちません。今回は、道徳科からは少し離れて言葉そのものについて理解を深めてみましょう。言葉は、学びの基本的ツールですから授業全般にかかわります。

(1) 内言(内言語)と外言(外言語)

月がきれい 美味しい

学生時代に恋をした先輩がいました。いとしの彼女とデートして「月がきれいですね」と言ったら「あらそう」と返ってきて失恋を悟ったとか。二人が見ていた「ツキ」は同じ月でも、温かく感激に震えた先輩の月に比し、彼女の月は冷え冷えとしていて別物でした。二人が知り合った頃、彼女手作りのお料理を二人で「美味しい」「美味しい」と言って食べたそうですけれど、後に聞けば、本当は何だ？これ？の代物だったとか。

月という客体は二人に共有されていたとしても、二人に映った月の感じはまるで違っていたということです。お料理の件には、外に出る言葉すなわち外言(音声言語)と内なることば内言があることを示唆しています。

コミは外言で 内言は窺い知れず

これをもう少し言語学的に説明すると、言語には内言(内言語)と外言(外言語)があって(注1)、内言とは、ざくりと言え、発話、書字される以前の頭の中のもので、言語形式を伴わない思考や概念、思考体系とされています。思考言語と表現される場合があります。日本語を母語にしている人は通常日本語で思考しているでしょう。その思考が内言です。外言は発話、書字、コミュニケーション言語とも言われる場合があります。コミュニケーションは外言によって行われるからです。「月がきれいですね」「あらそう」「美味しい」は外言。これらの言葉には、それぞ

れの内側に内言が存在しています。それを他者には了解できない固有の感情と意味といった人がいますが、言い得て妙ですね。外言の背後にある内言、それは他者には窺い知れないのです。

N君の首かしげ

初任時代のこと、「N君の大きな足」を例に文節相互の関係を学ぶ授業で、首を傾げた優秀な子がいました。「大きな、N君の足」。教科書文法では、「大きな」が「足」を修飾し、「N君の」も「足」を修飾する、それは、「N君の大きな足」として順序を入れ替えても関係は同じです。N君はそれが納得できないようでした。要するに入れ子型(注2)で捉えると前者は「N君の」が「大きな足」を包み込み、後者は「大きな」が「N君の足」を包み込みます。違うんじゃないか、そう思っただけなんです。私は、はっとしたのを今でも覚えています。「大きな足」にはゼロ記号(注3)があって「大きな足」に感嘆しているか、「N君の足」にゼロ記号があって「N君の足」に感情の重みがあるかの違いです。(この子は時枝文法を理解??)

要するに一見感情を伴わない無機質な言葉(外言)のように見えても、それは単なる表現の素材ではなく、言語主体が発するとき、内言を源に置いた、主体の情感(陳述)が隠れた表現になっているということです。

このことは、発出された外言は一致しているように見えても、内言は言語主体そのものですから、同じはあり得ないことを表しています。これを筆者は言語の個別性と言ってきました。

(2) 言語はコミュニケーションのごく一部

意思疎通

(1)で言葉には外言と内言があると申し上げました。内言はそのまま外にできることはありません。そりゃそうです。頭の中の小言が外

第4章 対話による学び

この章は道徳科授業過程における「対話」の意義やその方法について理解する内容です

に出たら大変なことになります。考えたことが文字になって出てくるコンピュータがほしいなどという人がいますが、それだけはやめてほしいと思います。3歳児は盛んに独り言を言います。同じように頭の中で発していることばをそのまま外に出したら、我が家は崩壊です。表に出す言葉をぐっとこらえます。

(参考 言語の行動調整機能 (注4))

金田一秀穂さんがおもしろいことを言っていました。金田一さんの教え子に中国人と結婚するという女子学生がいたのだそうです。その中国人は日本語がそんなにできるわけではないし、彼女も中国語ができるわけがない。それでこの夫婦は大丈夫かと心配したのだそうですけれど、今のところ大丈夫だというお話です。金田一さんの話は続きます。

ホモ・サピエンス 15万年間の鳴き声

「私たちの祖先ホモ・サピエンスは、20万年前に登場し、15万年は、「うー」とか「あー」という言葉にならない鳴き声のようなもので意思疎通してきた。それが5万年前、忽然とジャワ原人も北京原人も消えて全世界にホモ・サピエンスが広がっていきます。私たちの祖先です。「武器は？言語だったんだろう」と金田一氏は推察されていますが、氏が述べたかったのは、人類史ではありません。

現代人には、15万年の言葉を持たない時代のDNAが組み込まれていて、それで、かの夫婦も「あー」とか「うー」とかで何とかなっていると仰るのです。それこそ、ア行で成り立つ夫婦関係ということです。漫談みたいな話ですが、我が家でも「あれ、それ、これ」の世界で、しばしば思い違いや行き違いがあります。(注5)

(3)合意、相互理解という錯覚

筆者が何を申し上げたいか、もうお分かりだと思います。「理解し合えた」「分かりあえた」というのは喜ばしい錯覚で、個々の主体、内言が一致することはありませんから、

納得する範囲内の「理解し合う」であり、「つもり」になった「わかり合う」です。麗しき誤解の上に成り立つ人間関係と言ってよいと思います。「月がきれいですね」「あらそう」はふんだんに起きているのです。

授業でも、このようなことはしばしば起きています。低学年ともなれば「同じです」とか「いいです」と言いながら首を傾げている子がいます。内言と外言が食い違っているのでしょうか同調意識先行です。いや、内言は未発達で違いを認識できる段階までに発達していないとも考えられますから(注6)、何となく感覚的に同じだったり違ったりしているだけでしょう。仮に本当に「同じ」だとしても、言語主体が同じということはありませんから、実際は同じではないのです。

(4)ことわけ 言語により明瞭化

内言が他者の内言と合致することはありません。ないとしたら、どうして「対話」が成り立つのでしょうか。その一番の原動力は、理解しよう、納得しようという双方の力学だと筆者は考えています。前回に述べましたが対話は合致を求めておらず、納得する、あるいは納得できるプロセスに本質があるのです。

「ある方向性」の存在です。

あおによし奈良の都 「に」は「丹」

あおによし ならのみやこは さくはなの
におうがごとく いまさかりなり

万葉集328 小野老朝臣

「あおによし」は奈良にかかる枕詞ですが、「あお」は緑で岩緑青。「に」は土。染料「あおに」は奈良坂で算出された青丹(土)のことですが、同時にこの「に」は古代では「丹」で辰砂(注7)。丹塗りの鳥居のアカです。薫う(におう)も元来は赤の発する、輝くような強いアカが込められたことばだと言いますから、この歌の世界は岩緑青の青緑とアカの色彩豊かな奈良ということになります。小野老にとって「あおによし」は寺社も思い

第4章 対話による学び

この章は道徳科授業過程における「対話」の意義やその方法について理解する内容です

浮かぶ「丹(に)」でなければならなかったのです。一口にアカと言っても、赤、朱、紅、茜、丹と多様です。この歌の聞き手、読み手も「青丹」の発するイメージを共有したはずで、多くのアカから丹(に)を充てることで他のアカとの識別がなされて奈良のイメージが共有されます。このような、言葉による思考(イメージ)と表現の明瞭化、これを古来、「ことわけ」と呼んできました。これにより言語の意思伝達機能は強化され、さらに文字の獲得ではずみを付けました。

ホモ・サピエンスの強み 言語の機能

ワンちゃんは誉められたり叱られたりしているのは分かるようですし、恐怖や危険も感じ取っているようです。しかしながらボヤーとしていて「うれしい」「いや」「危ない」というような語彙を持っていないのですから感覚や本能の世界です。北京原人もジャワ原人も同じだったはずで、「あー」とか「うー」の世界です。

言語には伝達機能、思考機能、行動調整機能(注8)があると言われていています。その言語を獲得したホモ・サピエンスが、他の原人を排して世界を征していくのは当然な帰結でした。ですが、どのようにして言語を獲得したのかは謎です。

(5)クオリア 表現できない質感

「赤いバラ」「美味しい肉」といえば、母語を同じにしていれば通常は互いにイメージを共有できます。さらに「真紅のバラ」等と言えばバラの色がより精緻になってバラを思い描くことができます。が、考えてみると「赤いバラ」も「美味しい肉」はもちろん、全ての対象に、全ての人に、それぞれの「感じ」があって、それら「感じ」を表象することはできません。対象を表現した言葉がそれぞれの「感じ」を表現することはできません。言語はシンボルに過ぎないのではないかと考えてきます。金田一氏は「あなたはお刺

身が好きですか？」と聞くと、殆どが好きと言う。「それでは死んだ魚の生の肉は好きですか？」と聞くと誰も好きとは言わないと仰っていましたが、それは「お刺身」「死んだ生の肉」がもたらす「感じ」の違いです。

脳科学では、この「感じ」を「クオリア」として研究の対象となっています。クオリア？筆者も何のことか分かりませんでした。一言で言えば「感じ」です。(注9)

クオリアは、脳科学者の茂木健一郎氏が今やメインテーマにしている分野です。

茂木の言葉を引用してみます。

私たちは成長するに従って次第に複雑な言葉を獲得していく。それにもかかわらず、私たちの感覚の中に溢れている様々な「質感」を過不足なく表現しきるような言葉を獲得することはついにないように思える。いやたった一つの質感さえ100%表現できるような言葉はない。…略…
薔薇の「赤」の感じ、冷たい水が喉を通る時の「ごくつと爽やかな」感じ、…略…感じは、決して言葉では表現しきれないある原始的な感覚を持っていることに同意するだろう。質感を言葉…「シンボル」で表現しきれないことは質感に関する最も基本的な事実だ。私たちにあって、世界は、…シンボルでは表現しきれない質感に満ち溢れているのだ。

茂木氏はクオリアについて「言葉では表現しきれない」と繰り返しています。

一切れのソーセージを口の中にはうり込む！歯でかみしめる！歯で！ああ、肉のかおり！ほんものの肉の汁！それが今、腹の中へ入っていく。

ソルジェニーツインの短編「イワン・デニスヴィチの一日」は私たちにソーセージを噛み、飲み込むときの鮮烈な感覚クオリアがなければ、それほど強いイメージ喚起力を持たないだろうというのです。ソーセージを味わうことはクオリアを味わうことだと。これは金田一氏が「我々はことばを食べている」というのとほぼ同じです。

また、これは認知心理学における学力論に

第4章 対話による学び

この章は道徳科授業過程における「対話」の意義やその方法について理解する内容です

も通じます。本講座第2章4注2を読み直してください。

茂木は脳科学者で脳内のSystemとして心を研究しています。ニューロンの発火等と「脳科学的」な話に入っていきますので、クオリアとは質感、言葉で表せない感覚のようなもの、この程度にしておきましょう。

重要なのは、この各人が膨大に有しているクオリアは言葉では表現できないものであること、そしてこの質感は満ちあふれていながら、個々同じではないということです。

(6)対話の価値はどこに

今回この講座で言語学に寄り道したのは、「対話」は表出された外言の往還によって成立するものである以上、「言葉」の基本的性格について理解をしておく必要があると考えたからです。「言葉」と表するのは外言。内言は「言語形式を伴わない思考や概念、思考体系」とされています。非言語も含んでいるのです。これに脳科学の知見を挟めば、言語自体が各人の「感じ」、つまりは膨大なクオリアに包含されているということになります。クオリアは言葉で表し得ない質感のことですから、「対話」の「話」自体が実に頼りないものに思えてきます。

それゆえに「合意、相互理解」は錯覚と述べる筆者の考えに納得いただけるでしょう。ならば「対話」はできるのかと思えてきますが、そもそもクオリアはコピーできないのですから、対話の帰結は、結局は個に帰す、個の納得解しか答えを有しないのです。これが授業における「分かった」の本質です。

分かろうとする、納得しようとする、その方向性のある対話プロセスは「学び」への快を増幅します。そこに脳科学風に申し上げればニューロンの爆発があつて、それがまた学びに対する新たなクオリアを増幅していく

(このように表現していいかどうか分かりませんが)としか言いようがないのです。

「主体的、対話的で深い学び」の主語は学び手たる個、これを確認しておきましょう。

注1 ヴィゴツキーL.Sの分類

注2 時枝文法 辞が詞を包むという階層構造を主張

注3 用言の終止形、体言止めの後に表現されていないが、とりまとめとして「辞」が存在するという時枝文法論。ゼロ辞という場合もある。

注4 言語の三大機能の一つ

行動調整機能behavior-regulation-function

ことばには課題の性質をはつきりさせたり、多様な刺激の中から課題を解くのに必要な情報を浮き立たせたりする働きがある。また、ことばは動作を発動させる機能をもつが、自己の行為を意識化して制御・統制する行動調整機能もある。3~5歳後半ころにかけてしだいに意味が優勢になり始めると、ことばは内言機能もつようになり、思考活動と深いかかわりをもつようになる。子ども自身のことばが頭の中で行動を統制できるようになることと、自分で自らの意志と行動を決定するという自律性の確立には密接な関連がある。こうして、ことばは…略…自我や意志の中核的な担い手として人格形成にもあずかるようになる。…以下略…

[内田 伸子]

注5 拙稿 語り続けて 2009.11.16

コミュニケーションの随 観手、聞き手が居てこそ

<http://uchidat.com/report/4weekly/2008/mokuji.htm/>

注6 注4の内田氏の見解に示唆がある

注7 「丹」を辰砂とする説と「鉛丹」とする説があるが、古くから使われていたのは「辰砂」。辰砂は硫黄と水銀の化合した赤土で大和には水銀鉱床群があった。鉛丹は硫黄と鉛と硝石を加えて焼いた鉛の酸化物。辰砂は真赭(まほそ)で鉛丹を「に」とする説もある。丹後、丹波、丹生、丹羽 意味深い。

注8 言語の三大機能 内田氏見解参照

注9 クオリアとは「感じ」のことである。「イチゴのあの赤い感じ」、「空のあの青々とした感じ」、「二日酔いで頭がズキズキ痛むあの感じ」、「面白い映画を見ている時のワクワクするあの感じ」といった、主観的に体験される様々な質のことである。

(Wikipedia)